

# かしこい携帯電話の活用についての授業開発 —小中高連携の消費者教育実践—

鎌野育代<sup>1)\*</sup> 古重奈央<sup>2)</sup> 真田知恵子<sup>3)</sup> 伊藤葉子<sup>4)</sup>

<sup>1)</sup>千葉大学教育学部附属中学校

<sup>2)</sup>千葉大学教育学部附属小学校

<sup>3)</sup>千葉県立千葉東高等学校

<sup>4)</sup>千葉大学教育学部

The development of teaching strategies in the savvy use of cellular phones:  
Empirical study of consumer education for elementary, junior high,  
and senior high school students through cross-age teachings

KAMANO Ikuyo<sup>1)\*</sup> FURUSHIGE Nao<sup>2)</sup> SANADA Chieko<sup>3)</sup> ITO Yoko<sup>4)</sup>

<sup>1)</sup>Attached Junior High School of Faculty of Education, Chiba University

<sup>2)</sup>Attached Elementary School of Faculty of Education, Chiba University

<sup>3)</sup>Chiba Higashi Senior High School

<sup>4)</sup>Faculty of Education, Chiba University

これからの情報化社会を生きる児童・生徒にとって、消費者教育の一環として、携帯電話について正しい知識を持ち、自分で判断し活用できる力を育成していくことは重要な教育課題である。そこで、本研究は、子どもの目線から携帯電話の活用について考え、児童生徒自身が携帯電話とのかかわり方を考え、意思決定していく力を身につけていくために、小中高が連携し、互いに学び合うという形態の授業開発を試みた。

まず、小・中・高校の各発達段階における携帯電話の活用状況等について、質問紙調査を実施した結果、携帯電話の所持率の上昇と共にその機能の活用等に関する発達段階の違いがあることが明らかになった。そこで、高校においては、中学生向けの携帯電話についてのプレゼンテーションを作成し、中学生と高校生による交流授業を行った。続いて、中学生はその経験を生かし、小学生向けの「ケータイすごろく」を作成し、小学生と中学生による交流授業を行った。

本研究で開発した小・中・高校連携の消費者教育の一環としての携帯電話の活用を学ぶ授業実践は、児童生徒にとって互恵性のある学びであったこと、生活現実に沿った主体的な学びであったことが明らかとなった。

キーワード：消費者教育 (Consumer education) 携帯電話 (Cellular phone) 連携教育 (Cross-age teaching)  
家庭科 (Home economics education)

## 1 本研究の目的と方法

携帯電話は09年6月末には加入契約数が1億800万を超え、国民一人に一台は携帯電話をもっている状況にある。また、携帯電話・PHSを「使っている」人が、使い始めた年齢は、「13～15歳」(35.3%)、「16～18歳」(37.6%)が3割台半ばとなっている。さらに、性別・学年別で見ると「9歳以下」では、女子の小学生(32.4%)で高くなっており、これらの結果から、携帯電話の所持についてはますます若年齢化しているといえる(内閣府, 2007)。

携帯電話は、モノではなく情報サービスに対して料金を支払うこと、そのサービスを含め、料金システムについても複雑で、日々変化しているに特徴づけられる。また、一部はカード機能も備えていることから、携帯電話は、現代の多様化する生活を反映している教材と言える。

加えて、生徒の興味・関心が高いということが、この教材の魅力である。仲間らは(2006)、携帯電話は情報化時代の新しい生活財の一つになっており、情報化社会に生きるすべての人の自立には、情報収集の道具の一つとして、携帯電話の正しい使い方について学ぶことが必要だと論じている。また、中谷(2008)は、携帯電話を教材とした消費者教育の重要性も提示している。

これまでも、家庭科における携帯電話の教材開発(仲間, 2004; 小山, 2004)は報告されているが、いずれも高校生が対象であり、小学生や中学生を対象とした研究は報告されていない。

これは、携帯電話についての教育的取り組みがないということではなく、実際に、児童・生徒向けの携帯電話に関するパンフレットは、数多く配布されている。ただし、禁止用語や情報モラルを謳ったものが多く、かしこく活用するという視点からの取り組みは少ない。これは、携帯電話の所持や使い方や使用に関する知識の量について個人差があることなどから、学校教育の場で、教材化することの難しさが原因として考えられる。

連絡先著者：鎌野育代

\*Corresponding author :

しかし、これからの情報化社会を生きる子どもたちにとって、消費者教育の一環として、携帯電話についての正しい知識を得ると共に、自分で判断し上手に活用できる力を育成していく必要があると考える。特に、若年齢層の携帯電話の利用の仕方は、大人とは違うという報告（ケータイ白書、2009）からも、児童・生徒の目線で教材化することが求められていると言える。

そこで、本研究では、高校生から中学生、また中学生から小学生といった児童・生徒による異年齢間の学び合い学習が効果的ではないかと考えた。

具体的には、子どもの目線から携帯電話の活用について考え、高校生は中学生に、中学生は小学生に情報発信することで、子どもたち自身が携帯電話とのかかわり方を考え、意思決定していく力を身につけていくことをねらっている。

そこで、まず、児童・生徒の携帯電話とのかかわり方の発達過程を明らかにするために、小学校・中学校・高校の各学校段階における携帯電話について、質問紙調査を実施した。次に、その結果を基礎資料として、各学校段階における携帯電話を教材とした授業開発に取り組んだ。

## 2 携帯電話とのかかわり方の発達過程

### 2-1 調査対象

本調査においては、携帯電話の所持についての発達過程を明らかにするために、年齢差がなるべく均等となるように、小学校5年生、中学校1年生、高校1年生を対象とした。なお、小学校は国立1校、中学校も国立1校、高校は県立高校1校であり、いずれも千葉市にある学校である。詳細を表1に示す。

表1 調査対象

国立小学校	38名
国立中学校	76名
県立高等学校	178名

### 2-2 調査の実施時期

調査時期は、2008年9月～11月であり、各学校段階とも、主に家庭科の授業の中で実施した。

### 2-3 尺度の作成

質問紙調査項目の作成にあたり、先行調査として、ベネッセが実施した調査項目を参考にした。特に、携帯電話の機能の利用に重点を置き、「基本調査」「料金」「時間」「機能の活用」「トラブルの回避」などの9項目を質問項目とした。

表2 質問項目内容 注)

調査項目	質問内容
使用実態	①あなたは、携帯電話を持っていますか ②持つこととなったきっかけは何ですか ③あなたの携帯は危険なサイトなどにつながらないようフィルタリング・サービス等を採用していますか
料金	④携帯電話にかかる今月、また先月の費用を知っていますか 誰が、費用を支払っていますか ⑤あなたは、携帯電話の料金システムを知っていますか
時間	⑥携帯電話の一日の使用時間は（メール、通話、調べ物等合わせて）どのくらいになりますか
機能の活用	⑦あなたにとって携帯電話の次の機能は重要ですか a 家族との通話 b 友だちとの通話 c 家族とのメール d 友だちとのメール e ゲーム f 着歌、着メロ g インターネットの利用 h TV i アラームを含む時計 j カメラ

注) ⑦についての回答方法は、「全く重要ではない」～「とても重要である」の5段階評定尺度を用いた。

### 2-4 結果

質問項目①～⑥の結果を表に示す。

表3より、携帯所持の割合や使用時間は、小・中・高校と上がっていること、その他の使用実態も年齢とともに変化していることがわかる。

質問項目⑦については、携帯の活用目的として重要度が高い回答順に5・4～1点を与え、学校段階別に全体・男子・女子ごとに平均点を算出した結果を表4に示す。

各質問項目別に学校段階×性の分散分析を実施した結果、家族との通話、友だちとのメール、着うた、インターネットを目的とした活用においては、学校段階の主効果が有意であり、ゲームについては、学校段階及び性の主効果がそれぞれ有意であることが示された。また、テレビに関しては、性の主効果が有意であった。いずれも交互作用については有意差は見出されなかった。

これらの結果から、家族との通話については、年齢が上がるに従って、重要性が低くなること、逆に友だちとのメール、インターネット、テレビ、着うたは年齢が上がると共に重要性も上がることがわかる。なお、ゲームについては、男子の方が重要性を感じており、小学生から中学生に上がるに従って少しゲームから遠ざかり、また高校でゲームをやるようになることが読み取れた。

以上の質問紙調査の結果からわかる小・中・高校生の

表3 使用実態・料金・時間の結果

		回 答	小5	中1	高1
使用実態	①携帯の所持	もっている	44.7%	80.3%	98.3%
		専用のものはもっていないが使用できる	5.3%	0.0%	0.0%
		もっていない	50.0%	19.7%	1.7%
	②携帯をもつことにしたきっかけ	行き帰りの安全のため	44.7%	50.0%	30.9%
		友だちがもっていたから	0.0%	7.9%	15.7%
		何かの祝い	5.3%	11.8%	28.1%
		その他	0.0%	10.5%	23.6%
	③あなたの携帯はフィルタリングサービスを採用していますか	はい	21.1%	50.0%	24.7%
		いいえ	5.3%	14.5%	51.1%
		知らない	21.1%	15.8%	22.5%
料金	④携帯電話にかかるときの今月または先月の費用を知っていますか	確認した	5.3%	26.3%	34.8%
		だいたい知っている	7.9%	21.1%	42.7%
		知らない	36.8%	32.9%	20.8%
	⑤あなたの携帯電話の料金システムを知っていますか	知っている	18.4%	40.8%	30.9%
		だいたい知っている	13.2%	15.8%	47.2%
		どちらともいえない	7.9%	9.2%	9.0%
		それほど知らない	0.0%	7.9%	7.9%
知らない	2.6%	6.6%	2.2%		
時間	⑥携帯電話の一日の使用時間（メール、通話、調べ物を合わせて）はどのくらいになりますか（分）		16.1分	26.7分	70.7分

携帯電話をめぐる現状を参考にし、発達段階に対応した教材化を考えた。

### 3 高等学校での実践

#### 3-1 授業計画

- 1時間目 事前アンケート結果をパワーポイントで発表  
自分の学年の携帯電話に関する情報を知り、今後の参考とする  
班分け・プレゼンテーションの組み方・作業の進め方についての説明  
班決めアンケート実施

表4 携帯の活用目的の結果

質問項目	性別	小学生		中学生		高校生	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
家族との通話	男子	5.0	1.0	4.4	0.8	4.2	1.0
	女子	4.8	0.4	4.5	0.6	4.0	1.0
	全体	4.9	0.3	4.5	0.7	4.1	1.0
友だちとのメール	男子	3.3	1.4	4.5	0.7	4.6	0.7
	女子	3.2	1.5	4.4	0.9	4.8	0.5
	全体	3.2	1.4	4.5	0.8	4.7	0.6
ゲーム	男子	2.5	1.4	2.2	1.3	2.9	1.3
	女子	1.9	0.8	1.7	1.1	2.1	1.0
	全体	2.1	1.1	2.0	1.0	2.5	1.2
着うた	男子	2.7	1.6	2.9	1.3	2.7	1.3
	女子	2.5	1.2	2.5	1.5	3.2	1.3
	全体	2.5	1.3	2.4	1.3	3.0	1.3
インターネット	男子	2.5	1.0	2.2	1.4	3.6	1.4
	女子	1.7	1.1	2.4	1.6	3.6	1.4
	全体	2.0	1.1	2.3	1.5	3.6	1.4
テレビ	男子	3.2	1.7	2.6	1.6	2.6	1.3
	女子	2.1	1.1	2.2	1.3	2.5	1.2
	全体	2.5	1.4	2.4	1.4	2.5	1.2

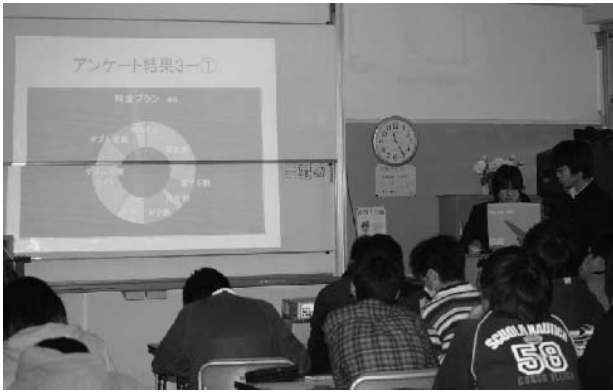
- 2時間目 班発表  
役割分担の決定と内容についての話し合いからテーマを絞り込む
- 3時間目 発表内容の概要をプリントに記入し、提出
- 4・5時間目 プレゼンテーション準備作業  
各班1台のノートパソコン配布  
この間コンピュータ室、図書室で調べることを可能とし各自の作業に入らせる  
データは家庭科室でインターネットが使用不可なため各自が持ってくるか、スキャナーで読み取り可能なものは教員側が加工しFDにて配布
- 6時間目 プレゼンテーション準備作業及び発表練習
- 7・8時間目 発表、まとめと反省

#### 3-2 実践の内容

1班を3～6人とし、1班の発表を5～8分とする。基本的にはパワーポイントを用いた発表とするが、各班の話し合いによりそれ以外の発表も認める。プレゼンテーションの内容は大きな4つの視点の中から興味ある分野を選択し、班でその視点の何が問題になるのかを話し合い、テーマを決める。

班を組む時点で興味ある分野についてはアンケート調査を行ない、班決めは教員が男女比を考えながら決定した。視点は以下の通りである。

- 視点1：料金に関する事
- 視点2：マナー・モラルに関する事
- 視点3：悪質商法等に関する事
- 視点4：最新機種・機能に関する事



▲ クラス内データを発表する様子



▲ 寸劇でワンクリック詐欺のやりとりを披露

それぞれの視点の中から各班テーマを決定し、テーマの現状・問題点・解決策もしくは今後の課題がわかるようにプレゼンテーションの内容を構成するよう説明する。プレゼンテーションは中学生を対象に組むことを前提とし、自分たちの経験を生かし、中学生が内容を把握しやすいように工夫させる。また、他者への伝達を工夫することにより、自分たちでも新たな問題に気づいたり、考えたりすることで携帯電話使用についての理解を深めるよう指導する。

### 3-3 交流授業の流れ

当日は家庭科選択の中学生が発表を見に来てくれるので、2時間続きの授業で発表と交流を試みた。本校は1時間45分で1日7時間授業を行っているため、作業学習にはやや厳しい条件であるが、効率よく進められるよう配慮した。

#### 〈当日の簡易指導案〉

		学習内容及び学習活動計画
導入	15分	前回までの状況確認 本時の目標確認・発表順確認 今までの学習活動を振り返り（中学生への事前説明を一緒に聞く）、学習の流れを確認する
展開	60分	各班発表（8班） 発表時間は入れ替え時間を含めて1班7分程度とする 各班の発表ごとに質疑応答を受け付ける 評価カードを1人1枚配布しておき発表が終わるごとに記入する（中学生も記入）
まとめ	15分	中学生と高校生の意見交換と交流体験をする。司会は基本的に高校生にとらせるが、難しい場合は応援に来てくれている大学生に助けてもらう 次時の予告

### 3-4 生徒の様子

#### 【高校生】

視点ごとに集まった班ではあるが、テーマの絞り込みに時間がかかる班もあった。8班中5班がクラス内アンケートを作成し、クラスのデータを発表の中に取り入れる工夫をしていた。

パワーポイントは高校の情報の授業ではまだ扱う前であったが、中学校で詳しく学習してきた者や、家のパソコンでやったことのある者など班に核となる生徒がいたため比較的スムーズに作業することができた。画面を組み上げる時点でアニメーションに懲りすぎて意見の対立が出る場面などもあり、熱心に活動している姿が見受けられた。

班によってはデータの図表化、構成だけを授業内で作業し話し合い、内容を詰めておいて、後は一人が家に帰って黙々と仕上げるところもあった。それは押しつけでは無く得意分野の発揮ととらえられた。

前日放課後は画面の見直しや原稿の手直しなど残って活動する班もあり、いつもの授業の様子とは違う風景が見られた。

当日は自分達だけではなく、中学生にプレゼンテーションをするということで朝から緊張気味であった。

各班発表の間に質疑応答の時間を設けた。中学生からの質問には精一杯答えていたが、まさかの質問に戸惑いの表情も見られた。後で質問された班に聞いてみると、「質問が出るとは思ってなかった。中学生が質問してくるのであれば、もっと調べておけばよかった」とのことであった。前時に発表練習が十分行えず、いきなり本番という班も何班もあったが、授業以外の時間で練習していたらしく当日はどの班も時間内に工夫を凝らして発表していた。

パワーポイント以外に寸劇を取り入れる班もあり、中学生だけではなく、応援に来ていた大学生や先生方にも



▲ 中学生の質問に資料を見ながら答える

好評を博していた。

事前計画では高校生に司会をさせ、中学生の意見を聞いて意見交換会とする予定であったが、直接意見交換があった方がよいということで、急遽各発表班に中学生を3、4人ずつ入れて意見交換を行った。最初予定と違う動きに中学生も高校生もとまどっていたが、話し合いは自然と高校生がリードして行われていた。

話し合いが煮詰まると大学生が間に入って、流れが切れることは無かった。中学生にも感想・意見を述べてもらい意義ある交流体験になったと考えられる。高校生からは中学生のレベルの高さとプレゼンをする難しさについての感想が多く寄せられた。

### 3-5 教師の振り返り

今回の連携授業を通して、異年齢の子どもが同一空間で学ぶ意義は深いと感じた。実際プレゼンテーションを組んでも、見てもらい意見をもらえなかったら生徒は自分達の成果を自己満足で終えてしまっていたかもしれない。年下の中学生から率直な感想や意見が出されたことで改めて自分達の学習の甘さや今後の課題について気づかせられた感がある。これは教員が授業をただでは得られない効果である。同年齢ではなく少し先に生きている者と続く者という異年齢の子ども同士だからこそ成し得た結果でもある。

生徒にこの授業の趣旨を話し、中学生が見に来ると言ったときは「えーっ、面倒くさい」「できない!」「恥ずかしい」等の意見も聞こえたが、プレゼンテーションを組み始めると、どうやったら受けるか、中学生にわかりやすいとはどういうことか真剣に作業に取り組んでいた。

交流を通して裏サイトの存在や被害の経験など直接聞かれている場面も見られ、悩みながら作り上げたプレゼンが中学生に興味を持ってもらえたと実感できたようである。

消費者分野の交流体験は初めてのことなので、中学生の受け止め方や理解度など前もって高校生に伝えることができず、生徒は自分達の数年前を振り返りながら作業をしていた。今回の連携授業で中学生が疑問に思うこと、興味深く思うこと等が把握され次回の交流体験時にアドバイス出来そうである。

今まで消費者教育の中で携帯電話は悪質商法の一部分でしかお目見えしてこなかったが、今回「携帯電話」という高校生にとって最も身近で大切なツールを教材化してみて改めて携帯電話が生徒の生活に深く関わっていることを認識した。授業前、学年全体にアンケートを取らせてもらい、使用時間、使用頻度、各機能の重要度等使用実態を知ること、携帯に対する生徒の姿勢が見え、教員側も非常に勉強になった。また、生徒が普通に利用しているプロフやブログ等の利用率も各クラス内アンケートにより数値化され、大人の目の届かないところで情報のやりとりが多くされている事実も明らかになった。

フィルタリングサービスをかけていても友人同士のメール交換で瞬時に様々なことが伝えられ、歯止めをかけることが難しい現状である。生徒自身がその情報を嗅ぎ分け、利用する術を持たなければ、情報に振り回され、

傷つけられてしまうかもしれない。だからこそ教師主導の授業ではない、生徒が主体となって調べる学習が自分自身の気づきを誘発するのに有効であり、重要であると考えられる。また、自分より若い層に伝えるという作業が、より一層調べ学習に熱を入れさせ主体的に物事に関わる力を強くさせる。このことが後に、知識の定着をしっかりとさせ本人の力となり得る。この交流授業を通して中学生は近未来の自分のあり方を想像し、高校生は現状を把握し、今後の課題を自ら導き出した。双方にとって意義ある交流授業であったと考える。

## 4 中学校での実践

### 4-1 授業計画

授業時数	おもな学習内容
1～2 時間目	授業計画の携帯電話使用の目的を考える。 グループ編成
3～6 時間目	携帯電話についての基礎的な知識の習得、 アンケート項目づくり、アンケート実施、 アンケート
7～8 時間目	高校生との交流授業（A実践）
9～12時間目	プレゼンテーション作り
13～14時間目	すごろく作りのテーマづくり、作業計画立案
15～20時間目	すごろく作り、相互評価、修正、交流授業の計画
21～22時間目	小学生との交流授業（B実践）
23時間目	学習の振り返り、アンケート

### 4-2 実践の内容

本実践は、中学2年生の選択授業において家庭科を選択した生徒27名（男子18名、女子9名）が対象であり、実施期間は平成20年9月より平成21年3月までである。交流先としては近隣の県立高校（A実践）と敷地内にある小学校（実践B）とした。また、学習内容は以下の4つから構成した。

- 1) 自分たち中学生の携帯電話との関わり方を考える。
- 2) 高校生による「よりよい携帯電話の利用」についてのプレゼンテーションを受ける。（A実践）
- 3) これまでの学習のまとめとして、小学生向けの「携帯学習すごろく」と携帯電話のプレゼンテーションを作成する。
- 4) 小学校へ行き、作成した「ケータイ学習すごろく」で交流を行う。（B実践）

まず、小・中・高で事前に実施したアンケート結果からそれぞれの年代別の携帯電話についての実態をつかみ、問題点、解決策を探った。そして、近隣の高校を訪問し高校生のプレゼンテーションを聞き（A実践）、そこでの経験をもとに小学生のためのプレゼンテーションと小学生向けの携帯学習すごろく作りに取り組んだ。携帯電話に関する知識や調査結果を土台として、小学生が楽しく学べる「中学生の暮らしの中にある携帯電話」という

視点で、すごろく作りに取り組んだ。

以下は交流授業（B実践）の内容である。

#### 4-3 交流授業の流れ（B実践）

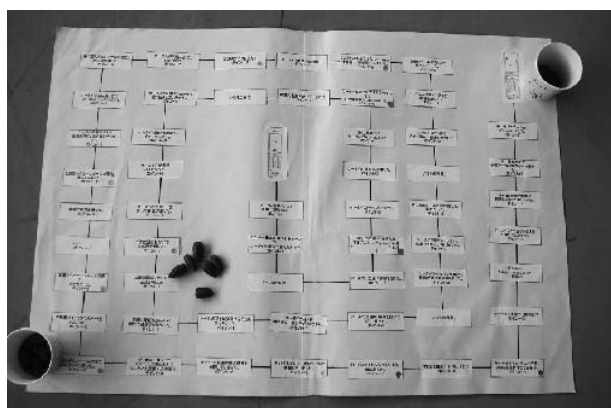
	時	学習内容及び学習活動
導入	5分	司会者（中学生）挨拶 本時の学習の流れを確認する
展開①	10分	中学生によるプレゼンテーション 質疑応答
展開②	30分	グループ内での自己紹介 すごろくのルールの説明 すごろく実践
まとめ	15分	中学生が司会となり、すごろくのマスの内容についての意見交換 学習の振り返り（ワークシート）

交流授業の内容としては、最初に中学生が携帯電話についてのプレゼンテーションを行い、その後、中学生が小学生の8つのグループへ分かれて加わる形で「ケータイ学習すごろく」に取り組んだ。このすごろくの特徴としては、最初の手持ちポイントとして、小学生ひとり一人にどんぐりを20個渡し、スタート地点から順番にさいころをふり、マスに書かれた内容からドングリが増えたり減ったりすることで、携帯電話のプラス面とマイナス面を学ぶことができるというものである。例えばマスには「塾の授業中、ケータイがなくなってしまった：ドングリマイナス2個」「携帯電話が手元になくて、不安になってしまう：ドングリマイナス1個」や「落ち込んでいた時、友達から励ましのメールがきた：ドングリプラス2個」といった内容である。また、「ダウンロード」や「ポケット」、「フィルタリング・サービス」といった携帯電話に関する言葉についても中学生がフリップを使いながら説明をしたり、クイズを出題したりしながらすごろくを進め、最後のゴール地点でどんぐりの数を競うというものである。

#### 4-4 生徒の様子

ここでは、この選択授業の導入部分で実施した中学生にとっての携帯電話の使用目的を探るといふ授業と小学生と「ケータイ学習すごろく」で交流をおこなった授業での生徒の様子をまとめる。

##### 4-4-1 中学生にとっての携帯電話の使用目的を探る授業



まず、「携帯電話の使用目的は何か」というテーマで意見交換を行った。そのなかで、生徒の意見として、通話は、緊急に話したいことがあるときに使用し、メールは通話するほどのことでもなく、時間に余裕があって、暇なときに利用するものという意見が多かった。さらに、中学生にとって、メールをする本当の目的は何かというテーマで話し合いをもったなかで、「メールは友だちとつながっていただけるから、メールが来ていることで得られる、必要とされている感が得られる」「中学生は、心のどこかに孤独を感じているからそれをまぎらすため」「自分が、一人ではないことをメールで再認識するため」「メールは単に娯楽目的」等々さまざまな意見が挙げられた。特に、中学生のメールの使用目的について、自分自身の孤独感や不安な気持ちに言及できたことは、大いに評価できると考える。中村（2003）は携帯メールをよく使う若者に友だちが多く、孤独感も低い一方で、孤独に対する恐怖感や孤独に耐える力の欠如の存在を述べている。

また、携帯電話への依存性が問題としてあげられているが、それについても意見交換を行った。実際、生徒の中には、携帯がないと不安な気持ちになる、または送ったメールの返事が遅れると不安な気持ちになるということを経験した生徒もあり、携帯電話の使用から、中学生の心の特徴が挙げられた。

##### 4-4-2 「小学生との交流授業」

実際、すごろくがスタートするとあちこちから、大きな歓声があがり、小学生も中学生もすぐに打ち解け、すごろくを楽しむことができた。また途中、「ケータイ保険って何？」と小学生が質問し、それに中学生が答えるなど、自然にやりとりがなされていた。また、すごろくのマス内容について「ケータイについての約束を破ってしまった：どんぐり-1個」をめぐる、小学生から「それは、どんぐり-3個でしょ」「そうかな～」といったやりとりがあり、発達段階の違いからくる考え方の違いについても、目にする事ができた。

そして、何よりも自分たちがつくったすごろくで、小学生が非常に楽しみながら学んでくれたこと、つまり自分たちがやったことが、誰かのために役だったという実感が中学生に自信を与えてくれたように思える。中学生の学習後のワークシートには、「私たちの話をよく聞いてくれてうれしかった」「携帯について小学生がいろいろ聞いてきたので、もっと調べておけばよかった」と

いった記述があった。

#### 4-5 教師の振り返り

##### 4-5-1 生徒の記述より

学習後に行った振り返り学習の記述には、「携帯電話について、まだまだ知らないことがたくさんあって、いろいろ知ることができた」「携帯電話のトラブルの対処方法を知ることができてよかった」また、「小学生におしえるためにすごろくを作ったが、むしろ自分のためにもなった」といった内容のものが多く見られた。さらに、「いつも何気なく、何も考えずに使っている携帯電話について、改めて考えさせられた」、「自分の携帯電話の悪い習慣を見直すことができた」というように、携帯電話とのかかわり方を見直すといった内容もあった。

##### 4-5-2 アンケートより

学習前後にアンケートを実施した。以下はアンケートの質問内容である。調査時期は平成20年9月と平成21年3月で、選択家庭科の授業の中で10分程度の時間の中で実施した。なお、回答は「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「ややあてはまらない」「あてはまらない」の5段階評定とした。

関心	①携帯電話の上手な使い方の学習に興味がある。
価値観	②携帯電話について学習することは大切なことである。
知識	③チェーンメールや電子掲示板におけるマナーやモラルとは何か知っている。 ④ワン切りやワンクリックといった悪徳商法への対処方法がわかる。 ⑤自分の使用している携帯電話の料金システムを詳しく知っている。 ⑥自分の使用している携帯電話の様々なサービスについて知っている。 ⑦フィルタリング・サービスとは何か知っている。
携帯の活用状況	⑧携帯電話の一日の使用時間は（メール・通話・調べ物等含めて）どのくらいになりますか【平日 分】【休日 分】 ⑨一日の携帯電話によるメール件数はどのくらいになりますか【平日 件】【休日 件】

アンケートの結果から、フィルタリング・サービスの認知得点は上がり、学習効果があったことが明らかとなった。また、一日の携帯電話によるメール件数については、平日も休日も学習前後に減り、学習により携帯電話のメールの使い方に変化が起きたことが示唆された。

以上のことから、生徒にとって、さまざまな側面から携帯電話の活用を振り返る学習であったことがわかった。

### 5. 小学校での実践

#### 5-1 児童の様子

中学生によるプレゼン発表の場面で、児童は興味深く耳を傾けていた。「チェーンメールってなんですか」と

いった質問も出され、中学生の回答に納得した様子でメモを取る児童も多くいた。ワークシートには、以下のような記述がされていた。

##### ＜「トラブルへの対処方法」のプレゼンについて＞

- ・メールの返信がこないと不安な人がいる。私にはありえない。
- ・返信が来ないと友だち関係がくずれてしまうことがある。
- ・ケータイには悪い面もあることがわかった。
- ・なぜチャットや掲示板があるのですか。

##### ＜「フィルタリング・サービス」のプレゼンについて＞

- ・フィルタリングサービスは、有害から子どもを守る。
- ・フィルタリングサービスのことがよくわかった。
- ・無料で安心できるなんていいと思った。チェーンメールを絶対惑わされないように心がけたい。
- ・チェーンメールでは考えれば分かるのに。考えなければと思った。

グループ活動としてのすごろくでは、進んだマスに書かれた内容を読み上げながら、楽しそうにどんぐりのやりとりをしていた。すごろくを進めながら、「ケータイ保険ってなに？」と中学生に質問し、それに中学生が答えるなど、自然にやりとりがなされていた。授業後には、以下のような感想が出された。

##### ○興味や疑問に関する感想

- ・ケータイのことがもっと知りたい
- ・ケータイに興味を持てるようになった
- ・悪質サイトについての対処法を知りたい
- ・保険に入っておくといいのかな

##### ○携帯利用の留意点や知識に関する感想

- ・チェーンメールやサイトに気をつけたい。チェーンメールは無視。
- ・ケータイをやる時は、ほどほどの時間にすることがよくわかった
- ・どんなことをしてはいけないかなどがわかった。
- ・ケータイの料金についてよくわかった。

##### ○携帯への理解や捉え方に関する感想

- ・ケータイには裏がある
- ・いいこともあるけど、悪いこともたくさんある。
- ・ためになった。これで買っても大丈夫！
- ・携帯の「こうしていい」「こうしてはいけない」がわかった
- ・ケータイの悪用にのせられないようにしようと思った
- ・ケータイの危ない一面を知れた。便利などころもあるけど、危ないところもわかった・便利だが使い方を間違えると大変

#### 5-2 教師の振り返り

上記の児童の感想より、児童が中学生からの新たな情報を新鮮に受け止めた様子がかがえる。中学生からの

プレゼンでは、未知の人間関係トラブルに驚いたり、未知の機能の利用価値に素朴な疑問を持ったりしている。また、携帯会社によるサービスについて理解を深めたり、自分が気をつけることに気づいたりしている。中学生が視覚に訴える形で情報提供をしたことにより、小学生は携帯電話に興味をもつとともに、新たな知識を得て、考える契機をもつことができた。

グループ活動としてのすごろくにおいても、すごろくから情報を得るだけでなく、中学生と対話しながら学習を進めることができる形態だったため、やはり興味をもつと同時に知識を得て理解が深まり、児童によっては自分なりに考えることもできたと推察される。

今回の学習で新しく知ったことについて尋ねると、下のようものが挙げられた。ここからも、児童が携帯電話に関する多様な情報を得ることができたことがわかる。

- チェーンメールに関すること (11名)  
「チェーンメール」「チェーンメールの対処法」  
「チェーンメールは無視してよい」
- 携帯保険に関すること (6名)  
「携帯保険について」「携帯保障サービス」
- パケットに関すること (4名)  
「パケットし放題」「パケホ」「パケットのこと」「パケットなどいろいろな言葉」
- 架空請求に関すること (4名)  
「架空請求と対処法」「架空請求というのを知り、きたらすぐに親に言おうと思った」「架空請求にはしたがってはいけない」
- フィルタリングに関すること (3名)  
「フィルタリング・サービス」「フィルタリング」
- 携帯電話の機能に関すること (3名)  
「友だちから、動画や音楽がもらえること」「携帯の新機能」「ケータイの使い方」「チャット」
- その他の留意点に関すること (3名)  
「お金がかかるサイトは見ない方がいい」「個人情報を書くのは危ない」「メールでけんかすることがあるから気をつけること」
- 携帯利用のマナーに関すること (2名)  
「使い方と使うときのマナー」「新幹線では寝ている人がいるから通話してはいけないこと」
- その他 (8名)  
「ほとんど全部知らなかった」「全部知っていた」「音楽を聴きながら自転車に乗ると違反になる」「ブログを使用している人がたくさんいる」「携帯の良いところと悪いところ」「壊れたケータイを修理できる」「無料会員」「有料サイト」

今回のような、ゲーム感覚で楽しみながら情報を得て、それについて対話できる相手がすぐ近くにいるという学習形態は、小学生にとって有意義であったと考えられる。しかし、この学習を通して自分なりの考えをもつことが

できたかどうかは、個人差が見られる。今後は、得た情報を自分はどう解釈してどんな考えをもったのかを明確にできるような場を提供していく必要がある。

## 6. 考 察

実践の成果としては、現代に生きる児童・生徒の生活における、身近で興味の高い携帯電話を教材とすることの意義があげられる。高校では必修授業において、また中学校では、選択という形での実施であったが、性別に関係なく、児童・生徒は意欲的に取り組んだ。特に、児童・生徒たちの様子から、自分たちにとって真に必要な学びだと捉えていることが伺われた。携帯電話という教材が日々新しく進化していることも、生徒の学習意欲の持続につながったと考える。小学校では、すごろくという手法により、携帯電話についての新しい知識を楽しみながら得られたことが、成果として挙げられた。

二つ目の成果としては、小学生・中学生・高校生が学び合うといった連携の学習方法をとったことの効果である。中学生にとっては高校生、小学生にとっては中学生という教師ではない少し上の年齢層から教えてもらうことで、数年後の自分の姿を想定しながら、より現実に沿った学びの場が展開できたと考える。

そして最後は、家庭科という教科において展開する「消費者教育」の意義である。便利なものを上手に活かしながら生活するためには、生活者の立場から、モノとヒトのかかわりを多角的に思考し、判断する力の育成が重要である。本研究における授業実践を通して、家庭科における消費者教育の意義について再認識することができたと考える。

## 引用文献

- 一般社団法人モバイル・コンテンツ・フォーラム。(2009). ケータイ白書2010
- 小山佳寿子・白井由貴子・森田陽子・小川育子。(2004). 高等学校「家庭」における携帯電話を用いた消費者教育の実践. 消費者教育, vol. 24, 135-142
- 内閣府。(2007). 第5回情報化社会と青少年に関する意識調査報告書
- 仲間広美・花城梨枝子。(2004). 高校生のケータイ利用と消費者教育：意思決定スキルとの関連から. 消費者教育, vol. 24, 151-158
- 仲間広美・花城梨枝子。(2006). 高校生の携帯電話利用傾向と消費者行動および利用マナー. 日本家庭科教育学会誌, 49(3), 181-187
- 中村功。(2003). 携帯メールと孤独「第10巻子どもとニューメディア」. 314-326
- 中谷ゆう子。(2008). 高校生と携帯電話：消費生活を通して. 消費者教育, vol. 28, 125-131